



天
醒
紀
談

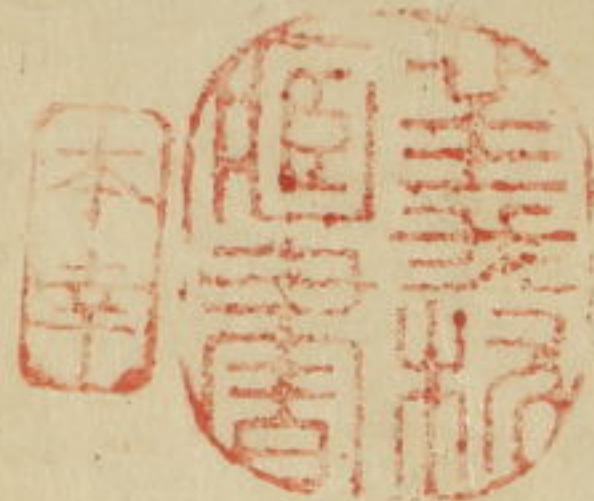
卷
二

4. 曾 5
73
2



5冊
73
巻2

相模屋
本儀



提醍紀談卷二目錄

酒老癖 碎花八半用
黄金ハ天下の宝
老狐脱菴
幸菴ガ奇字
朧月夜
蒲生氏郷古事と徴
斤袖夜着
武将の源詩
全唐北詩逸
さうろ繪

小倉色紙の茶會
燭政と授
老狐僧子變ず
義婢
異域同奉の巻
氏郷利休贈答此
古老軍物語
一夜百首
葦手歎繪
狗見の怪



見終の格言
縁骨と野
治水北元圭

陣小屋の備
夏島廟

提醒紀談卷二

江戸 山崎美成 編輯

酒ハ微酔花ハ半開

○萬の事十分は酒その上ハ加へがまきを夏は此奉あり古
人の云酒ハ微酔ハ飲ミ是ハ半開子ハ是れ此言ハハ
るる酒十分は飲ちハヤがらる少飲ミ不足あるを樂ミ
好る事ハハ花十分は開けハ盛るて精神ハヤク散ヤ
す一花ののまごひろろ盛ありと古人ノ訓養生張文饒
曰處心不可著則偏作事不可盡則窮と云美酒飲教
不盡の謂あり世小十分を溢るといふ諺あり

運慶が口傳

○ある人佛師運慶が口傳とて諸りハ佛を作るとハ耳鼻を
ハ先大くすべ〜と〜耳鼻を十分おきわご子斷走を存子小
くえぬるとき小大くあ〜と〜口目とを先小くす〜
〜口目と十分おき程小あ〜と〜大くえぬる附小
くあ〜と〜子をば〜耳鼻と大子〜口目と小くすること
第一の口傳とす〜と〜是ハハと韓非子子出て宋の獲頌ガ
〜事あり此木偶人と伝る意を何事おもあ〜と〜あむ
ら〜と〜つけ〜と〜い〜と〜曲禮小君子不盡人之歡不竭
人之忠以全交也と〜と〜一〜と〜一〜人の我為子
杯酒と傳〜と〜歡愛を篤くするを人ハ歡〜と〜人

の歡と十分小きをむるやあ子ありあ〜と〜あれて及て至礼
あをれりあり興ありんとすバ〜と〜無興ありあ〜と〜の
あり駿臺と〜と〜

雑談 小倉色紙の茶舎

○筑紫にて岡白秀次公定家卿此うせられ〜と〜小倉の色紙と
求めは〜と〜まひ〜と〜沸中を改り色紙用きの水舎あり利休
と上客ありてお侍三人あり〜と〜四月二十日あり一日此曉方
の幸あり〜と〜風呂此水茶湯あり〜と〜坐敷へ入りてあり〜と〜
〜と〜短髪此火も〜と〜釜の沸音の〜と〜い〜と〜ま〜と〜とよ
う〜と〜あり〜と〜ある水地意あり〜と〜あひ居る物〜と〜折休乃
居〜と〜ま〜と〜好の明障子子〜と〜あ〜と〜あ〜と〜ま〜と〜ま〜と〜

障子とあけられさるる月影のありぬ中のうちあやのさうら
りたるあつさるるふもとあがりよりしてなるも小倉は色紙のぬけ
物ありと名やそのまじ

あままた啼つることをあがむまどらあり明の月そのれお
誠子お子ゆれかりしときといちんうさあしは時利休その外れ
るさても名譽さしきの水紙意うると因音子感ドまらるる
前備

老人
物語

黄金を天下の重寶

○奢侈を以てありあふむを聖賢の常ありある附
東照宮へ内閣扇と進するものあり黄金の装ありありとひく
と御覽しきこれハ黄金ありハあまやとく付石と水石よせ

つひく思ふべしこの御ありよりし御前あり石小つけて
よきの黄金のありやある附ちよ北させぬひくぬ水気色不
くちやくこの園扇と水紙く蔵りきくつきより御ありしが又
宣く天下はこれ黄金なり重宝をあり多くハ領地と人よつ
くもこの黄金大切ありとて黄金大切ありしが北
これと以て人と賣すべしす領知ありも至る重きハこの賣
金あるがうりやく黄金の黄金を以てくくの如く此色のし飾
まるハ以の外此事ありこの御ありと折生佐妙のお話りお

老談一
言記

燭跋と授子せ給

○慶長の江後府あり

拜兵庫と云ハ詠訪の一族あり 既菴と稱てあり居るは此
天正十三年の事ありその好兵庫承ありてそれ嫡子
家と嗣ぎ父の職と襲て名も兵庫と稱す彼既菴誤と
る性質あり勤仕多し其北の家にこそありてありしは
る既菴あり附假寐しと人ありし何と云くひそく不伺
るふ子老孤ありありしふその人うち驚まつやぐり兵庫
不告り既菴これと賞り兵庫子見えしと云く人正と流し子
兵庫三姉あり女武心あり勤めて吾家事と助くると嘗悦
ごころあり何ぞ人と人子ありしと云く差別ありんやこそ
のありしと云く是れ若うれども既菴ハ遂にこそを云くりし岐
岨子あり興福寺にふ精舎子訪り桂岳師といふ和尚小牙

とよせり師に孔子僧衣とあり一室と云へく處あり副司
の役と云へし此子居ると云く年ありし終に其師も彼が
云くありし子つけてやうその人子ありしと云くて愈ねん
ごころありしひさし叔師所用ありて既菴として飛騨國あり
安國寺人使しつと云くその居す日和田村といふ地と
稱くある回舎子ありし其寺ありしが指てる石名諺の鳥
銃ありしハ名人國友が造ると云くありてあれと云て望見ハ
既菴その形とありしと云く其夜既菴と云く圍城裏の
やうに子何んぞくせし居るを主人の管と云くて
ミクもふ老孤の僧衣と著しありしと云く一歳子こそを
覺す子果しと云く孤ありしと云く此既菴が書寫す

る般若心經その地子傳へ今子存るそれと暮刻しとて
予小贈る人あり 聖孝勢の古雅ある実子千年外の寫經小
異あるとありその帖此来子二孔紀事と載り

老孤傳子變ず

○下総國飯沼郷の弘雅古き浄土宗の叢林ありお傳ふ昔時
穉下子一人れ傳ありて論議をよすある日人を寄集て相
撲ととりて遊び我れはうくの傳もそれ場子ありて撲々る
小願力ありて數十人と投伏々々その事終て困憊とさる子
室一々をば我れは室子入り寝しと熟睡しとるその隣に鄰
屋子住る傳の傭より二孔を視ふ子毛もあざう子衰へたる
老孤ありとるを驚きあやしとてその面をまき人あを語

らぐありしがの傳怪ももことと知てす子をち隣に
謂ふとるを吾ハ実子人ふあは今日常れ寐て辨らず吾
形と視ひえとる事との愧しきよとをや二の面を辭しとる人
一と云隣傳ねんごろ子二孔を留まとも安入すやぐく急ぎ方
丈小ありて上人子謁し別と告ぐ且啓しと云吾小通力あ
るを別子のとて何卒拙き技とて一洪庇の万一と謝せ
んとあふあり上人の兄んとと效するかの何あやあんと
云上人曰吾常小兒んとと形ふそのハ唯阿弥陀佛來連の
相の二孔とが能せんや吾やとありとるをば對て云よく技さ
ん然れども來迎の相と現する時子ありて上人をわくす
も青と敬ひとねするとありとるをば若さやうおき肘ハ吾所耐小

死するありとてハ上人送せられしハ種々撃つて衆人
 を驚かし見せしむ暫くも業をなすひき西方より殊勝佛
 觀音勢至此二菩薩おほい衆の聖衆列ありて虚空小光
 明より花障を音樂奏えそのありさ夜と音々殊妙と
 へんうさおくり言おもひの難ううわ上人も衆人もおのく光
 元ハ奇異渴仰せられしとて佛名を唱へ伏し拜せられし
 也る事逆の相おし消失する僧もそのありし死したりと
 述ハ上人やう歎き悲むるれどもさういふ人よりて彼
 僧とあへて葬り石をまきたりとや今尚これ地子存すと
 云蕉意
 漫筆
 幸菴の壽字

○上野は小幸菴と号する白沢の翁あり自言百二十八歳
 里より幸子佛説とめて人を教諭す人も亦信するれ
 多うの諺子傳せてこれおし寓居し法と説き戒を授く
 うる吉凶禍福おほい物事の事と同し皆あきらむるれと
 告ぐ又よ人の會中とて善及不義誇ふとのあれは書
 字と書て初年とて落敷くて興ふあり付治するさう
 湯との外子熱うり乃進ハ片足入れうち登き飛あがる
 又ハ抱身子毛生る尾ありうれば此者肝とつが一人
 と吸るるわこ小主人急き初てすれば老野狐みく啼あう
 飛さうぬとぞ今これ書とてさう草力人の如くあうすと
 ンども字畫具りて玉拙うり次第一奇事とて一藍田
 文集

文政九年源弘賢摹刻

壽

印大六釋天清とあり

行齡百三十翁幸菴



義婢

義婢の事 義婢十歳あるものとき農家の女を
買ある日主人の思を抱き海濱に遊むを居たりや
獺犬の何れよりあつたり人突然こゝろ取り抱く
の児を齧つらん義婢の思とて主人とて牙を咬む
禦ぎたるやと小娘とて齧れ血あはれ子あるとて
見と救さざらん抱きたりやとて犬は去りたりぬ
婢若痛を忍びてあはれり思を主人の母子に
あはれりて息絶ぬこれを救えんとすれども
國の事この事とせむひその義を感へ
と建てらるる事と

東龍 菴集

朧月夜

○豊臣大岡肥前こよとくこいひいぜんの名古屋なごや子陣こじん場ばの小屋こやを
見廻こまへりしぬ子朧月夜おろつきよと額がくをもちたる小屋ありあはれく
此後こゝろトミこれを見小登こたかあはれとて同とちをせし子孫のま同藤とんとう六むの
里出いづ心氣おんき色しきよき一重いづり子後こご六むの夜よあがきと仰おほせし
尋まね白米しろまいを副たせへ賜たまはりしとあり 備前老
按おずるは昔むかし大岡道灌おおいわだみづくの指さし不出いられし附つけ西にし子こあひ賤しんが屋や不
兼こを切り不ふあはせられし小この家けに女め山吹やまぶきの茶ちやとさし出で
しを道灌みづくその言ことをばりしとて事こと誰たれも知しる事ことあり
子ハ慕が景集けいしゅうとてふる云い集しゅうもありて云い人の名な言ことはれし二にの
事ことハ曲まがまの方かたをふる子こ優まさりておぼめ古ふる子こ照てるりもせず

くとりもそそぬ妻つまの衣よれ朧月夜おろつきよ不ふあはれおそふきと云い
今の言ことをそそふゆふハつらむやきこやひとそめひゆる

異域同幸の巻

○何なんの附つけ子こう御軍ごぐん家け以上いじやう洛らくありしとて以も旗はた幸さち武ぶ後ご庄しやう房ぼうと云い
人ひと供く寺てらあはれ京師きやうし子こ上のぼり烏丸うま光みつ廣ひろ卿けいの奇き合あ子こ付つけ生せいせし
まらるが初はつ杖しやうとて歌うたの出でをいなる小こ彦ひこ常とこよめる
一ひと葉はちる柳やなぎのつれ絶つ望ぼうより景かさ人ひと細こき杖しやうの三さん日にち月げつ
光みつ廣ひろ卿けい此後こゝろトミ何なんれもことやこの頭かぶの奇きハこゝろ北きたへ何なん
あしよま北きたへも是これ子こつづく奇きを出ですいこゝろその歌うたを
やめられしとてや白しろ樂らく天てんか家けありし會あはれ時とき合あ陵りやう懐わい古こ
いふ歌うたみづつとてゆるるが禹う湯たう先せんゆるりその前まへ聯れん子こ

千尋鐵鎖沈海底一斤降旗出石頭（少セキト）この詩出久まばその外
の人止るるとやうなり如原吳地（コノ）幸お同ト逸話

蒲生氏郷古事と徴

○蒲生氏郷のゆと小佐木高綱がおといふ名なき證あり
細川忠興といぬんころ子我子賜されと乞たましう（バ）直理
右指つこれ世をくく（カ）家小信さゆる色の山くけ似
證を賜り候といひは進む氏郷（シ）子ま名をと人子（ハ）いいてや
こふまゝいれさういふころ人といふさのさささう
とく被證と賜らる（カ）老談一
陸奥ある安達郡子小川ありその向ふ小黒塚あり安達
ハ氏郷の領地あり一（コ）小黒塚を伊達家の領地ありとく

引見

争ひのありしとき子氏郷の云古事子平の居盛るよあり
陸奥の安達郡の黒塚小黒（コ）こころありとてくハまこと
とくるとありいふ子と中され一（コ）小黒く人黒塚を安達郡
子屬一とるト合明ありとく争ひ止り

氏郷と利休と贈答の事

○氏郷病臥しうりりる（コ）利休訪ひたりころ人ハ名なき茶
及れすき者ありうバ寝あふふ（ハ）たて對面あり利休
病のありさぬと又く（コ）所養生半と又えハ第一兩年もり
く文武仕屋の所大指あり吾邦子おつく一人二人の所大名
お北ハるれ子つけ此ふつけ大切ありとらも（ハ）ハ履外おが
ら所保養おろそくありやう子存ハ所由ありぬくといひ

しうハ氏紳

○

かぎうあはハ吹かぬどきちるもれとんぐき妻の山風
とありひまはバ利休候とおぐ一殊勝あ方の以事うきといひ
てまぞくハあのともをすくくさやうよんてどもといひあぐ
涙とおさへて

○

障とえがつりぬ先子さうへう一雲子ハとれな喜柳の枝
といひく好お語りひらうやうくく三梅うらう 備前老
人物誌

斤袖夜着

品物

○ 沼井家の藩士草野文左衛門つとく人若妙へ来りて二四年
の同ハ衣具とくものもかくて夜分寐る時ハあり合せ
綿入布子と引くけて掛くう五年ちうもさくやうく

品物

扱着とくく人々も子世同子利るそのとを矣扱あくく
その製四幅あく寸合ハ袖をくくまおさく斤才ハ袖と
つけて夜着は是ハおく戦軍弁用の制あく斤袖夜着
と名つくるや一さい

東照宮あもこの斤袖扱着と所用ひあくくく扱家
内ハ残らん竹笠子れ上子遊とまてくるちうくあく
く二尺四方あとの巻四五枚あり自分もその上子望一畧
ある附の儀とて是等あくその飾は事ハおひやるく

按ずる小裁ふく陣障あどのをうハ別て便利簡要の
事とあねとすルハ古老の功者あるゆのハ一閑張の是也

櫃と造り途中ハ軽く陣中取返さうハ為桶の代りも用
る有りうる事さう古老の工夫あり軍防知新もあ
く北ハこゝ不楚せん

軍中の語

○同人城中子痛むする時も并當とハ持たず 干飯ノ焼米の
類と袋子ノ持来り用あき時ハ出さず一づ食ひて
多く食せん一日ノ二度あるハ三度と定めて夜も食す
るとあり利なき時ハ出して食ひたりそれと向ふ人多く
食されハ中もともあり又隙とも費され陣中もくは使
利ありとさう朋輩れ并當の所と云調へると見て泰平の
以代とハ云ふがらあり者もさう幸うかゝく大に歎息セ

一が又謂やう泰平やとあり難きも此ハおろかるありさぬ
とありハえりやせしするともありしと様へるとあり
一ありあり府朋輩れと云合せ戦場のやうする上や
瘡と云る件と見ゆると同人ノおぼしき例のさう
用のと云いふ子志きり子望もくも中ノ是非ありさう
おの具よそをひる子棄り瘡と左太ふら振りく進む
すやれて目ざぬしきありさすあり瘡と云ち振るも毎子
の思ふとせしとありされん事なりと云言いと受てされハ
こそ初めあり無用の事ハすあり我わう若き時子さる
れさちつくと存く今年考へるも力もかゝる人瘡一本と
小自由子するとあらぬ也云と云と受するありく此如く

あつハ人にももつれさうく傷きハあつぬとさうそれと
らうと情なきとありすつ今時の人これ武勇出くをさ
やうのとあつ一も用ふ事あつくまでらほ遠ひ上
ハ何事とやうとも耳あもつらぬどきありとてお子致息
せりれり幸子人の武をさしすもを笑つハ笑ひて今
世の今戦物と一なるんさきめありさやうのんぬさハ何
事も出来ぬ第一合戦あつハ用子三とのハあつぬどき
ごう致きつとありハ草

武将の詠詩

尾州義直師匠戸北鉄めり春興の作あり

梅花紅綻惠風香艸色江城日々昂酌酒彈箏更無事已知

恩顧在君王
今林森子この真跡此羅山先生子贈らうとこのありと
本朝一すく伊達政宗ハ世人その武勇とのと梅すれども嘗
人一首

馬上青年過世平白髪多残軀天所綴不樂如今何

おのつ子干戈授冗の附子書りて南戦北争何そ一日つらとも
寧きととゆんやちと何れ暇ありさうつと賦し言と吟どた
ちひぬらん今日春平の世子居あつ宴安日ととて文武を
講習せざるを愧へきのを子あつすや

一夜百首

祇園與一名ハ正卿好子瑜と改ハ南海と號す紀藩の入り

て有名世子史元より元禄五年壬申の歳時子年十七あり
春分の日子會々々々自その才と試んんとく畫の午此刻より
夜の子此刻まで五言律詩百首と賦しとく世人あまひハ
ゆめで腹稿のあんとと終ふとのあき子あつたごとく再ひ
この歳の終りあり秋分の日大子宿客と書し午の刻の初
めより諸客子進り終りて各詩歌と書せし南海客と後
笑ふあつた孝子伊也々々詩と賦す夜いおと半あつたふ
百首の詩完く成るるされハ春分の作と前後二百首妙句絶
唱のそあつた一句此雷田するものあつたつとく終りき
歎服せざるハあつたつとくやこれ子あつたその名遠をふ史元人そ
の才と称譽しとく日本をく皆川淇園の茅富士谷成章ハ
詩史

才すかされてお徳子通多善あると予已名家畧傳
子より曾淇園史一人成章と一夜百首の詩と賦しとく
あつた小淇園先子成るる々一人も亦成る成章孝子敏捷の
才とめていふあつたハ成との逢きあやとめやとくつと詩成るり
とく出すとるるハ各あつた一首と詠る人つとこの時の詩と持
初世子布く奉はるの書子評あり又廣海惟直年十四歳幼
より好て詩と賦す一夜百首と賦しとくその師和氣行蔵子示
すこれ明年二月十五日和氣氏新子宅と移り客と書す
の月童子惟也とく試し詩と賦しとく興とて歌と韻
とハ世客の余するところあつた日著百篇をやく成るり客
とハ世客の余するところあつた日著百篇をやく成るり客
とハ世客の余するところあつた日著百篇をやく成るり客

子清ふてこれと試んこころて推おして新あらたき先まの例れいの如ごとくありて辰たつ
小こ姑たつめ申まを子こ終つれり先生せんせい讀よまき句く々々起おこありと梅うめちりるその
敏びん疾しつのうりるありぬとくくの如ごとくこれ寛かん政せい十じゅう一年いちねん己未じみ乃なり
歳とし此こゝ幸さいあり抑おさ齋さい
筆ひつ記き

全唐の逸詩

○唐の康熙年中子全唐詩一百卷と編輯す唐三百年の詩
と網羅すとて之これを市河寛いちがわかん高たかうりて全唐詩の外ぜんとうしの外控おさ
彼小逸こゝとて吾子存われするものを採拾さいしつして全唐詩逸三卷と
善よくその書彼土小流傳こゝして鮑氏はうしが知不足ちふそく高叢書中たかそうしちゆう子收こしゆう
め刻す道光三年翁廣平おんこうへいが跋あり極きくて賞歎すこれや実まこと子
唐詩こゝ子盡すといへんも可べあり古人の技書ぎしよを落葉らくえつの如ごと

いととるハ且まありううても猶遺漏なほいろうなきとああとるとる予よりて
顯戒論録起一卷と載すその書古昔傳こくせつでん衆しゆう大所だいしよ尚なほ学がく求もと法の
たり小入唐こゝせし附つ子撰述せんしゆの書ありその所由しよゆとあるはめり
吾邦弘仁十二年唐の貞元九年唐土の人最澄上人さいていじやうじんの日本國にっぽんこく
小還こゝると還かへるれ叙文じゆぶんありび子五言律ごごんりつ此詩九首あり低者ひげしやを
おのおのく吳ごありこゝ子その一二句と摘てきす吳歎ごたんのく句く子同郷朝どうきやうてう拾しつ
白はく雲うん路ろ夜や着ちやく星せい也や孟まう光こう句く小衆香しよしゆう隨ずい貝かい葉えつ一いつ兩りゆう洞どう禪ぜん衣い也や
道高だうこう心しん轉てん實じつ德とく重じゆう意い唯ぜい堅けん也やとてくくりりこれこれの詩句ハ詩逸しじゆの
逸いつとてつつべべり

葦手歌集

○源氏物語梅うづらとての巻まき子章しやうお中將式部所なかつしやうしきぶしよの宮みや此こゝを攝しやく督とくす

ちの大臣おやとの此中將どうちゅうありあ葦子あしこの繪えとと抄しやうひくひりりののち
 まへまへをを皆みな人ひとのの子こををむむべべららめめりりととありありこのこの葦子あしこ書かきととりりふふののち
 ららしし書かきのの事ことををりり入い木き乃ののの書かき子こ々々ののちちろろのの濫らん筋しんととりり
 ととりりろろのの書かきもももも母はは子こををれれととりりてて古ふるののあありりてて書かきハハ今いま
 ののちちろろののちちろろととりりあありりととりりあありり是こゝととりり繪えののちちろろののちちろろ
 人ひとののちちろろののちちろろあありり日ひ培つちか枝えだ小このの事ことととりりろろののちちろろののちちろろ
 奇き矯きやうととりり別べつ抄しやうありありととりりあありりててあありり日ひ培つちか枝えだ小このの事ことととりりろろののちちろろ
 小こののあありりてて源げん氏し抄しやうももりりひひつつけけままりりととりりあありりととりりあありり
 ままりりろろののちちろろののちちろろ按ありり五月ごご兩りやう記き子このの繪えととりりてて葦子あしこととりりあありり世
 子こ抄しやうのの傳でん人ひとととりりあありり古ふる書かき子こ々々ととりりあありり葦子あしこととりりあありり世
 ららぬぬととりりあありり證あきありありととりりあありり書かき考かうととりりあありり入いににあありりととりりあありりのの詳しやう註ちゆ

小ありこありてて花はな香かう餘よ懐わい子こありありててのの色いろ葉はありありのの葉は此こゝありあり小
 文字もじとと書かきありあり水みづ石いし香かうををりりととりりあありりととりりあありり世
 子こ葦子あしこのの中ちゆうととりり文字もじ子こ綴つづりりととりりあありり先せん達だつのの説せつり
 くくのの如ごとくくととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 愧かととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 親おやくくととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 字あととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 引ひ用もちられれととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 花はな香かう餘よ懐わい小このの書かき體たいととりり精せいくくととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 表あありりててととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり
 小こ世よ百年ひゃくねんををりりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありりととりりあありり

公あり母なき人やおもひ也軒反 紙江の 一他者 品経の標紙の義子
 んや又武彦國比企那慈光山子ある一品経の標紙の義子
 たる云繪も字の草画を用ひて繕ようきあり一ありとあ
 るも古のわいでうきあるべし花雪餘情子水石をあるの状
 めと書ありありとありと考へあそすべし然とそれと
 繪ありとつと入木及の書子めとつきて草字とありあ
 らん草のち靡きたるさぬめちし書とちのめ
 ありと新説ふんひれとやあらん以上
 此一條を猶池原の草字考と云ひの考證精し
 あるされと入にまきよか評語と加へてつとふその
 要と撮てあるんあり評子、本書子就て見んべし

四條大納言公任卿の書せられ一草字書

好ましかつるやるうら
 神のこまのりら
 かをうたの舞
 あふいと入な
 銭

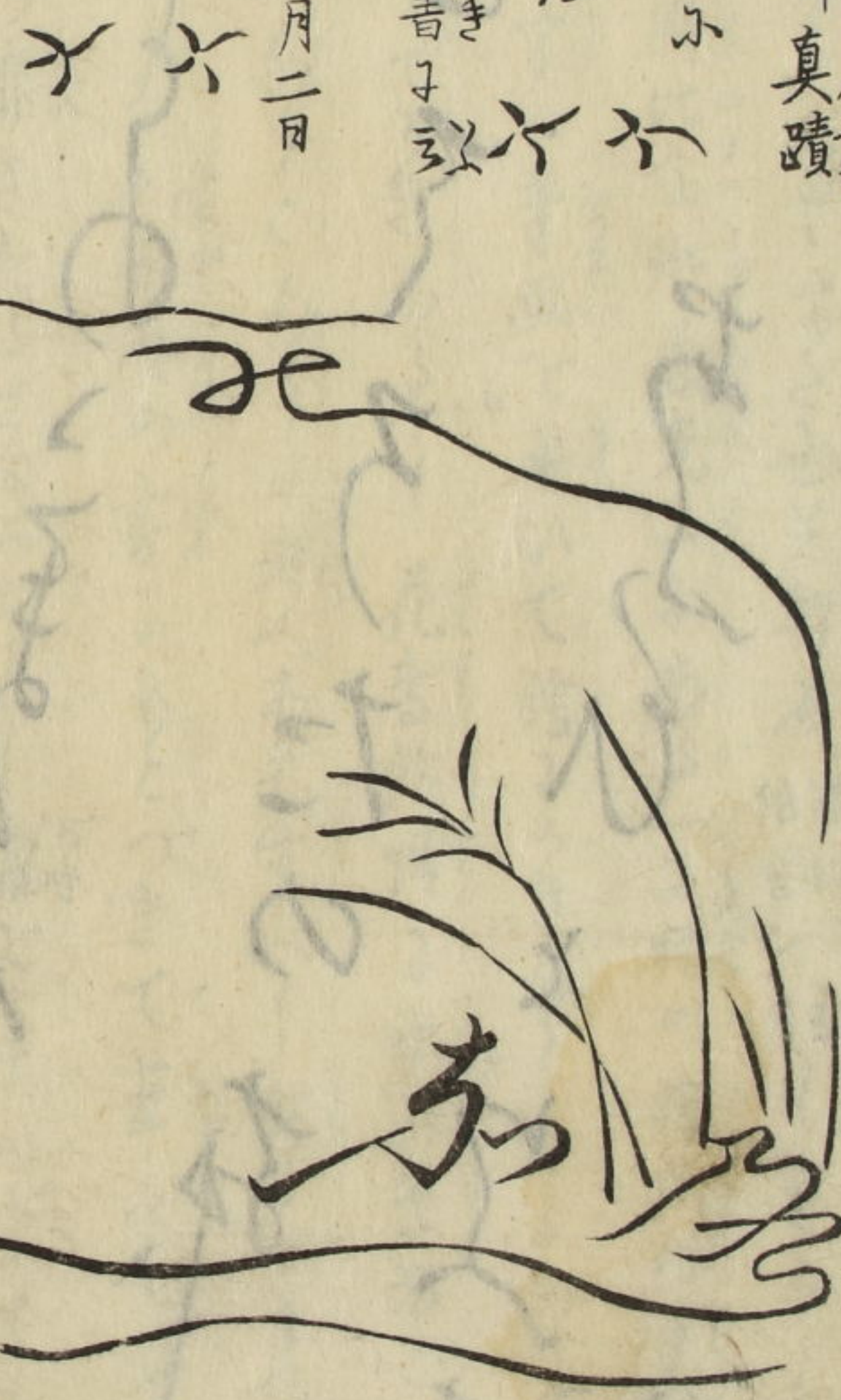
世尊寺伊行卿真蹟

朗詠の下巻

あまのつづ

右真蹟の奥書

永曆元年四月二日



五月雨記子又々々々香の具

文明十年五月十日
於東山殿執行

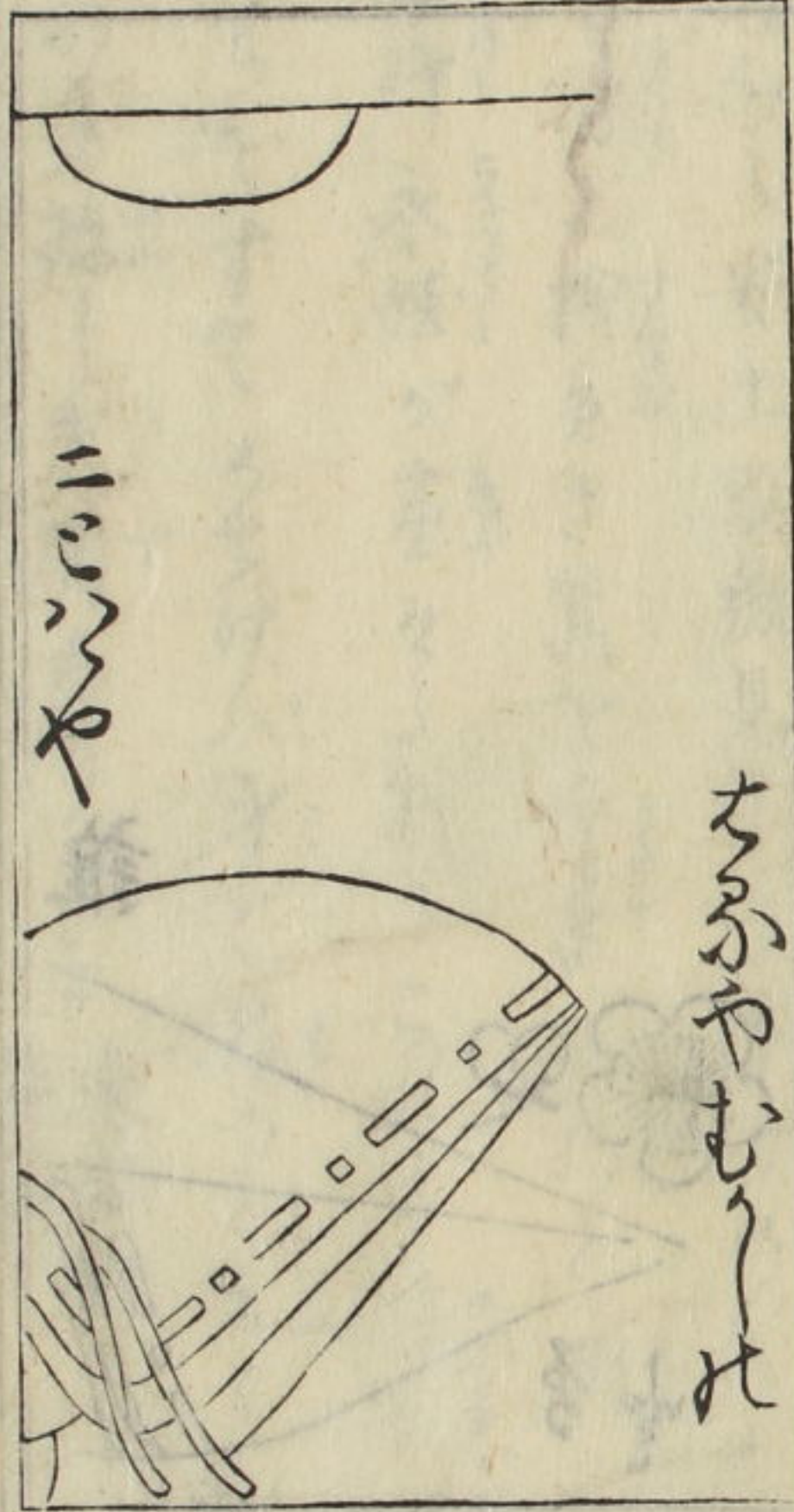
桐の葉もやまにけぐさあり子々々々
らんをまつとあはれ

一番梅の花も袖ゆれ白そとまやわりの
月ふらふらや

たふやむうれ

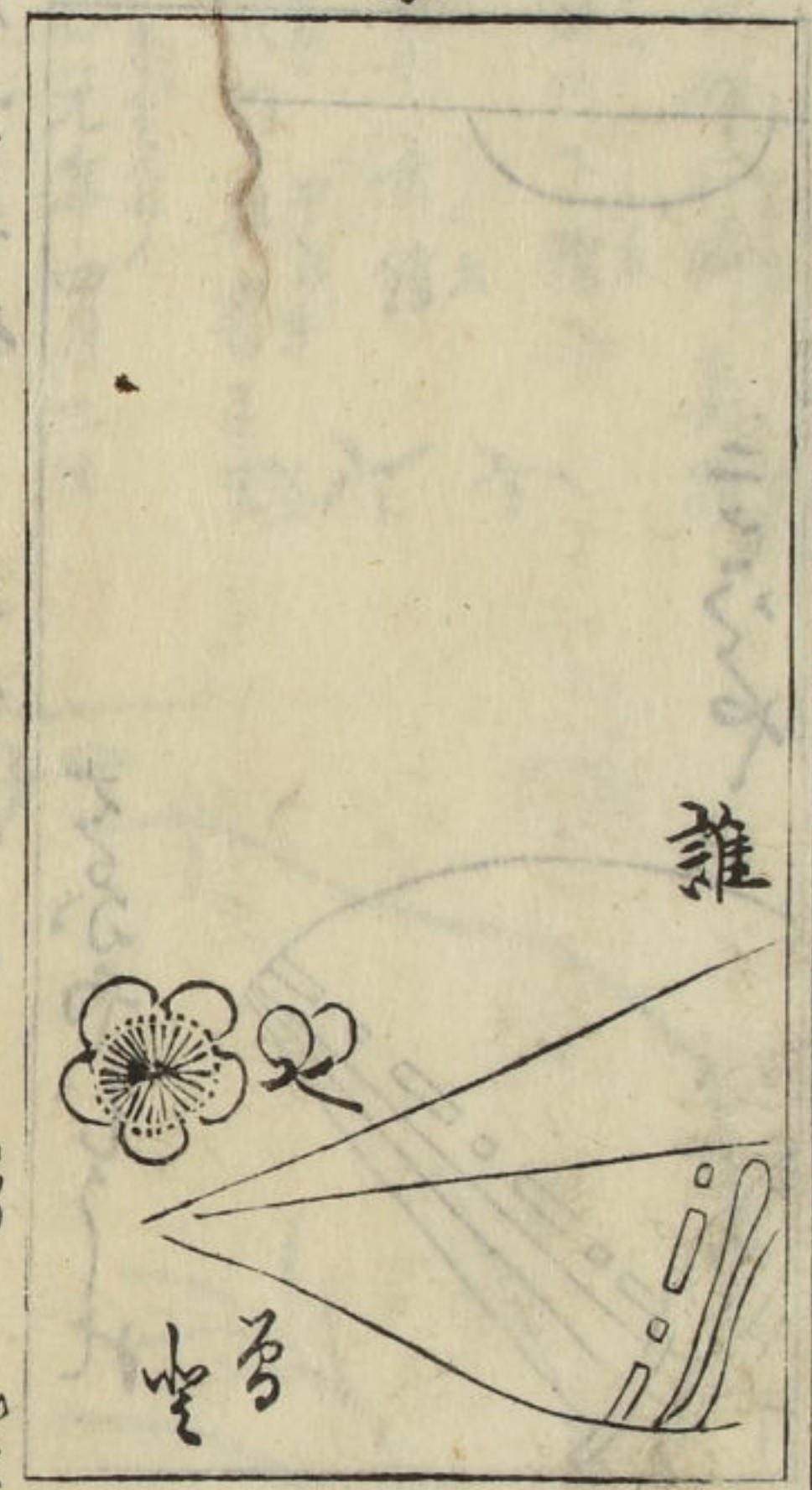
うさ

表



二ノ十八

東



誰

空

右市引の山ささる戸とあけおきて我あつ人と誰なるむむると云

あてめて

あてまうと云

表



我

人を誰

むお

ささる繪

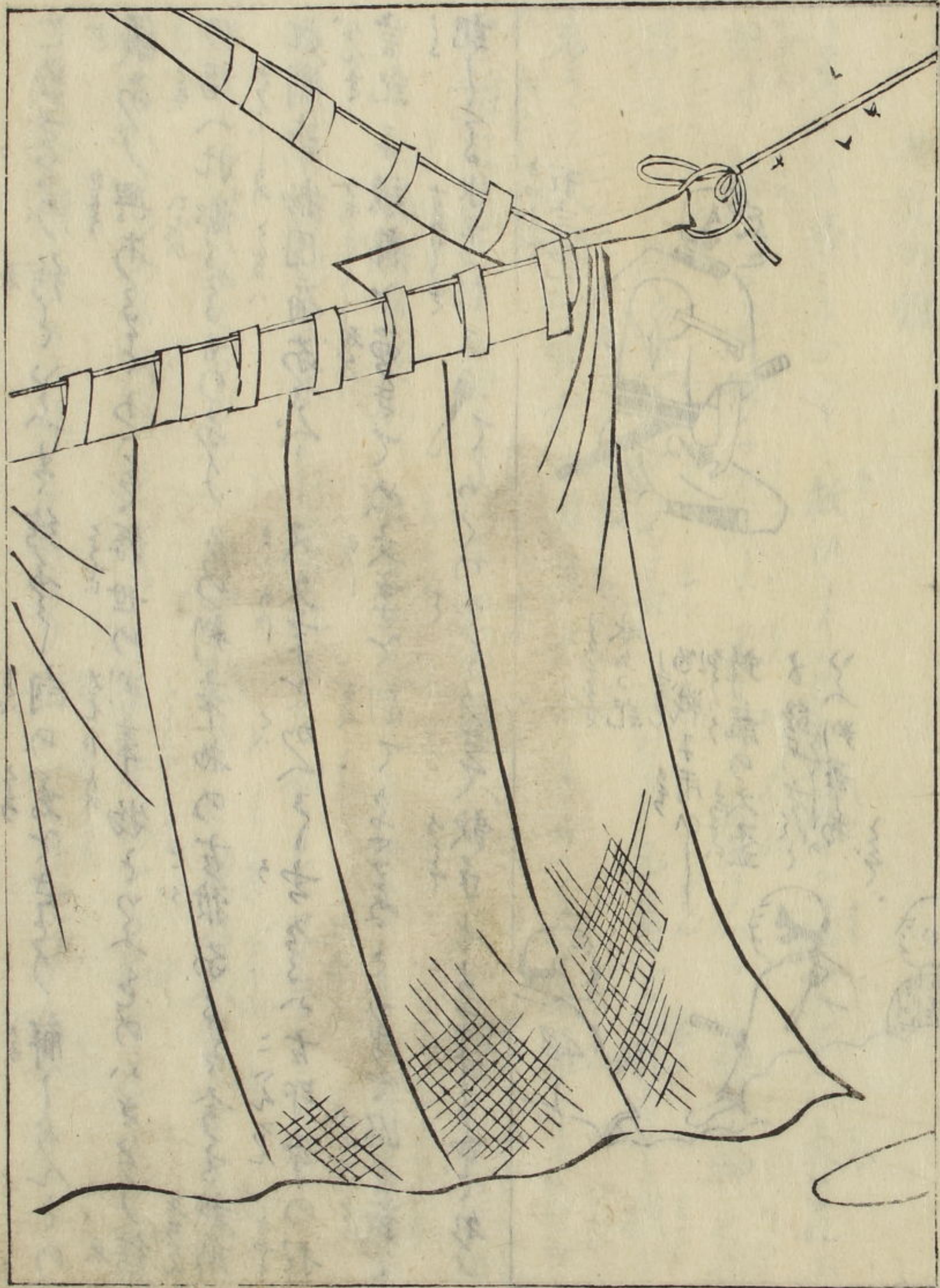
○あふのさ 安土の級見寺の佛殿乃繪馬子男子が捲とつき

て捲と傍子捨をき箕と斤子小捲く側子帳とつと云

とと捲所永徳が畫々ありこれ信長公所好みと云氣と

ま子つらとすてうをけふと捲つと云とをささる繪子仲付

らささる繪しき園ありと云 遠碧軒 隨筆



二ノ二十



信長公貴

人々をまきと並べしを成す

うせげばえを拵

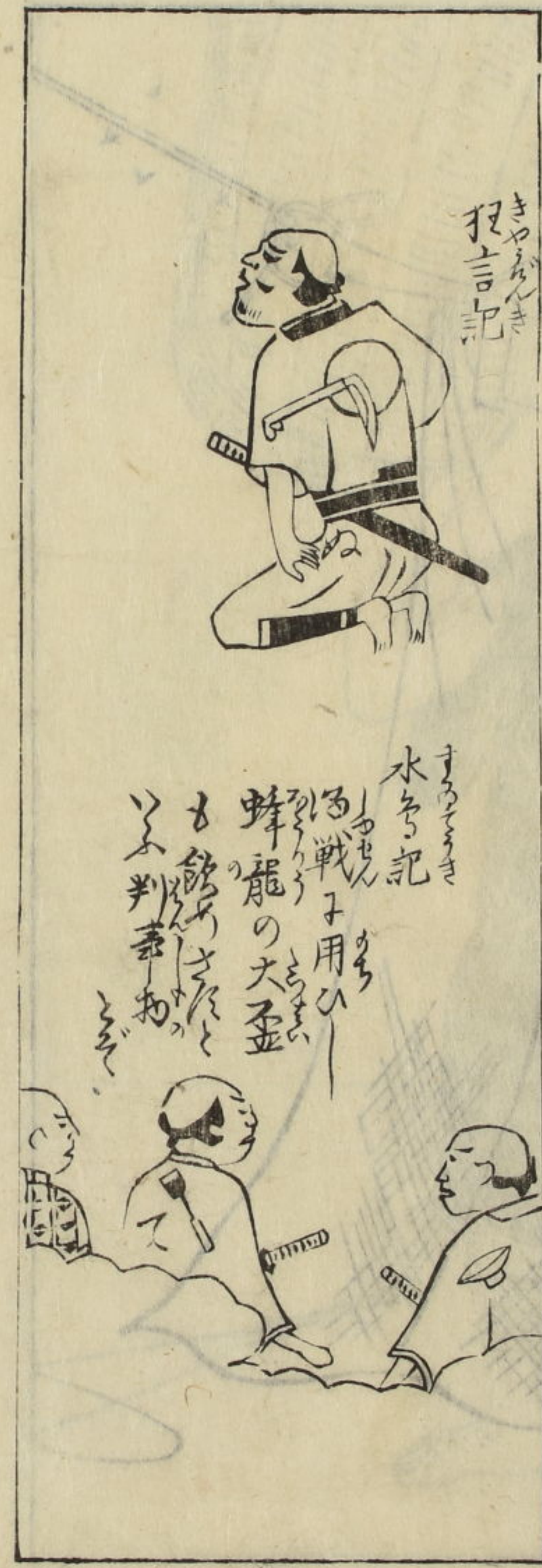
あぐるあ

神野永徳華

永海寫



このさきつり 繕くよふも繕あり 詞の素ときさつり 解しめんとの
 義あり興あるをよそよそ 浮世の判事物とつよものハささつり 繕
 の唱へ此鄙くさるものあり その判事物の古雅あるを今も裁前
 此判事物固扇ありふー又文字と加へるをささつりハ古印本の扱
 言記子 鎌輪とあきてぬ文字を副てるをささつりよまをセ 沼合裁と
 記しる水考記子 へくくのかくくきそ 飲手とよまするをささつり



狗見の怪

○よろづれ事いおつて 救ひとうとて 理よ 運やときハ天いれハ
 歿す殺にとも 理よ 吸へる天より 穢すべし 詩子神之格
 思不可度思とつり 神の善と助けく 不善と助けき 誠子
 あり 天明壬寅秋九月 案 君命よより 浪華子 赴き
 て 梅莊道人とつりもの子 ぬる人よ 人と相す 案と相
 し 云 福壽を足し 且案の妻已に 姪ありと云 案三 巽小
 案師の 浮崎 東榮とつり 此を相して 子年と云 今今子 承
 信と云 此言とつり 如く ぬる 今 敢る人の示す言 哉
 信と云 とつり 人再言やう 東榮何と云 知らん 示す言
 ともつて 疑ふべし ず されより 存十一月と云 果して 姪あり

る上ありしうが及人の見るころに実子ありと云ふ
今春癸卯の歳二月同僚邦上士由ある君命ふきりし未
都より来りて隣軒宿するを數十日ありその姓ある
と云てよりさびつて歸りて公に言ひ公もあつと子悦び
まひて公ハ奉ふ命夫人を妻破子命づる同く伊
勢國白土神宮子參詣せしむこ子於三月二十七日
とつ孔く伊勢為ふ赴く及すう急きて四月七日伏
見よりうらたを親族朋友のさう迎ふ出づる子
樓子宴すその家と接直と云り河内甜あつとまじ僕ら
うぬく子破る輿中子一足の狗見眠る居るその狗見北
毛色黑白ありて恰猫の如く僕がうきてこれと逐る

あが子何地新らん去りぬさて破り性障き好むら子
ありし僕等言ふ言あをを破る狗見の輿よりうらと云
宴終りて舟と命づりて河内子うらたを破るあつと破
が媼と子迎つて笑談あつと時と移すうらと僕やうく
伏見の狗見れとと話し出づるよ家母も媼も息あまき云
やうと此狗見と何とて連れ来りさやと云く狗の子と生
むと易く今破ハ妙さう嘉瑞ありとて急き僕と伏見子や
りて捕り来りし狗が初とさるとあつと子一孔子う
て僕らの地は逗留しとて遂に尋ねて幸き来りしと云
富山の如く同年五月所抵あり村中の空倉子子と生る
ある所彼狗見その倉子往きと云ハ母孤怒りて狗と追ふ

狗あやふれが逃げきりたりその七月子ありや成せし
又うの孤を飼ひて飼ひたる母孤つの子勝つてあそびし
死せしれより狗見疾つき人と驚きく驚きくあそびす死
すこれよりあやふれあそびのあまり平外の子命を
と養育あまきしして淀川に沈みたり八月三日破男子と生り
恒ハと名くあ母とをいれ親族あそびも雀躍しき喜びあ
見恒ハの子健あそび母も善あそび唯後が乳汁一滴も出
よつてを隣に求むといふも遂に乳母とて入て養ふこれ
より見常子病あやふれ乳子毒あそびの如くこころし治
療と乞求むといふもさうし功驗あそびたりあふ下島村五
助といふ子の按摩の技子長ず石を按摩せしむ五助が

病因と論ずる衆醫と同しす此見れと胎毒ありしと小
乳毒のどごありしと見の病もや愈らりゆく程あり又風と
ひきて咳嗽つよし七きつめて苦しき時ハ声も出ず絶入り如
くうし十日ありと絶り平ある夜の子寤れ外ゆれ
て箕中のきりしと捨てる狗の居るを見たり乃吐りて
何故に死しものか又来るやといハ狗と我始より死し
あそび人き罪あり且遠くより幸きありて又養育あまき
あひなき死しと再来る此の子ありといハ乃云汝実
子来るしとてあそびんが何ぞ興の中子うしと且汝と幸
あそびしとハ平ゆとより養育あまきとあそびしと汝が畏
孤と飼ひ病犬とありしと人を養育するも汝が罪ありは汝

色しより家内子孫多うううううハ尚仁怒て加へんのことといひ
 乃基を拘つて〜謀あるありさぬありまらう平定内子ハ
 ハ狗居たりやうそ刀と抜くこれと謀んとあり〜是ハ狗子
 ハありて五助あり愛愛てあり〜是ハ傷ある見の匠て止
 されハ接つ接りつ〜再又眠りよつ〜子愛子神人何
 よりともあくあり平子若く〜は女見の病をハ何とや
 病症のうろろなるハ常の病ハあらず醫業の強を疾日と
 経ても衰へざる又あや〜くや此見れと佳ふ〜病を
 五助が乳毒の論信す〜その病根をハ狗の爲す且〜系
 里まられども狗あひて見を憾あといふハあ〜唯扱死
 の魂の寄る〜ころあきあ〜子見子託〜く女子訴ハ佛乃

所謂身死して魂の將速と〜そのあり今僧と〜般系心經
 七護誦せよハ病速ハ愈あん恙吾言と信せんハ試子猛虎
 の乙骨と取て見の側子垂き〜の寄〜時一孔あて接よと
 三年てまると〜ハ愛も亦覚〜西山采子清〜乙骨我
 母〜神人の愛れあり〜接る子獲あり〜うり愛業の護護一も
 忘れず今あや耳底ハあり平〜孔と上回氏子若〜上回氏お
 や〜してある〜者子〜を〜書子若れハ〜者三姓
 拘見を牽あり養ふ子舊高の如き〜そのむ〜あり〜此頃の
 理子り病て人と驚〜ハ〜ハ〜此逆の如あり〜葉づき〜よ
 里その〜ころあり〜と〜も化の僕れと〜謀す〜人
 け〜や〜孔狗の迷〜と〜ころあり此拘見が因縁と佛と〜

一途と言ふは、一途にありて拘りありて人あり前生子故ありて
一途に拘りありぬが、あつぬは、けありされば、ややく死するも亦
也、あるあり、佛子、於て舊、この理あり、一死、拘りてより、この
家、此、思、子、故、ち、人、と、する、の、く、あ、れ、さ、も、他、人、の、子、死、家
子、少、く、然、る、あ、き、と、あ、さ、だ、こ、と、以、て、あ、ま、子、つ、く、悲、む
あり、只、僧、徒、子、市、施、して、被、拘、の、冥、福、を、祈、ら、復、あ、や、
こ、あ、ら、さ、ら、ん、と、云、ふ、あ、ら、さ、く、上、回、氏、歎、子、予、小、勸、む、れ
ハ、清、峯、寺、あ、る、準、及、上、人、子、修、ふ、て、人、の、如、く、供、養、し、私
子、法、号、と、難、傍、知、圓、と、つ、け、ら、う、く、海、見、の、病、愈、う、鶴
鳴

鈔文
臨終の格言

○ 松平伊豆守常子、庚子の肩衣と兼用せしむすありて、
氏中とて、うらやみ、や、さ、げ、さ、れ、こ、も、評、定、和、へ、出、席、の、附、む、う、
ハ、と、さ、と、庚、子、肩、衣、子、頸、巾、と、兼、用、あ、り、し、と、あ、り、こ、れ
こ、か、ん、と、此、為、子、つ、と、さ、れ、や、こ、と、さ、く、同、人、病、氣、日、を、ふ
る、あ、く、小、重、く、お、成、そ、の、存、へ、あ、く、ま、う、な、れ、を、養、母、子、息、子
と、こ、さ、し、一、枕、元、子、舟、を、以、居、ら、れ、一、中、養、母、の、や、さ、さ、く、ハ、病
氣、大、切、と、思、ゆ、ま、ハ、や、さ、り、只、今、ま、で、ハ、存、の、世、此、事、あ、ど、一、向
子、う、ぬ、ひ、や、さ、れ、ず、や、と、も、二、方、附、あ、れ、ハ、第、一、事、う、ら、ま、く、存
世、の、た、あ、り、子、念、佛、や、も、と、ひ、と、す、ら、勸、め、ら、れ、し、子、伊、豆、守、常
て、水、衣、の、席、事、子、ハ、い、と、も、私、事、を、知、年、より、召、出、さ、れ、格
別、子、此、恩、と、悲、家、り、し、も、の、あ、れ、バ、せ、め、て、る、の、第、一、分、の、一、と、を

此恩を報いやくつゝふくふぐのこころ 新き届きやさぐ
くる大徳おれハ指さるゝ外のとのこありさまを少一も
此奉公の事をこそそんがやれハが沖津公くハ唱へやべ
く存ハ念佛を唱へやれハ新もこれあくとそんやされ
うら

陣小屋の儀

○松平伊豆守の嫡子甲斐守經輝家督あり一子陣小屋
切経の具こつ久やづき方家士へ下知せられハ武功の諸
お殿よりそへくも總トて流紙おれハお海む奉あり切
経の小屋を無用あふとすハ經輝重母て一通りハ衣
此奉おれども此番地ハ地必と遠ハ失火多きあり

その外此上洛日光此成もハ此傳り鷹野おの席此先番
お勤いせり子大名多く此供を中ハ大方所陣さるべ
此所番以下切経さる小屋を用子所も兄分もさるく
んそ此為おれハハ此種ハの務りを以て少く多く支取せよ
と申し付る所然も子寛文の末ハ日光所登山ハ新石
宿此固りも酒井家お勤められハこそろ子俄小麻彦と已
づのひつろれそ此務り子急小甲斐守子仰付らるめをや今日
う明日と申すやの奉おれハ切経の交代畫扱の差別なく
いそぎありハ甲斐守子ハうねて用立ありハ小屋具とも建
子持事りたる也子こころたるや登のあとハ切経小屋を掛
るくハ平日ハんがけ手取りのやとと人々耳目とわたり

う〜たり 明良法 範後編

按ずる子屋女侯の名譽ハ神託録と云し諸書子載ると

一云 頗多一 孫それ子息甲申も亦才智拔羣の如と格

別の少家扱と世人幸子孫扱も實譽するにあり

絲屑と野

○ある耐土井大炊殿の居間子一尺なりある唐絲の切らる

か何〜と接ひ次子誰うあると噂は外ハ大拜仁多属とヤ

を考の士まうりあるハ〜を是と其の方子預分おくしヤさる彼

者〜二百〜と其の縁とけ〜りある〜と次の間小居

一若き者〜あゆ縁屑何の用あり〜びぎぞ大名子似合す

ある〜ひ〜〜笑ふりのもあり〜とありその信二三年も五

て大炊殿うの仁多属と接ひ先年その方子預けおきま

縁切〜尋〜れ〜は〜是子〜とて中若より〜出〜ハ

〜ハ〜脇指の下け緒の〜を接ひて家老とあひて

これと見よ三年あ子仁多属子唐絲の切を接ひ預けおき

是外の若どもハ我事と各きりめ〜とハあゆ縁切が何の用

ハ〜べきや〜と〜笑ひ〜め〜多〜る中子主の〜付〜と

て大切子おさる〜と奇指あり仁多属子二百石ととらすべ

〜と中候さる扱二の縁屑の大切ある〜けを接ひてすべ

一此縁ハ元来唐土北土民の事あり棄て〜り唐を飼ひ

〜の縁とあり唐土の商人北土あり〜るの海上を終

て是邦へ返り〜り長崎表の町人の事子〜り扱ハ京大坂の

ものども世のひらりつひ子は戸までつりかゝるのあははるの分い
うたうりやとあゆむとさやうの幸芳あり出来しあのをとせり
あまはるる塵芥とありて捨るこゝろハ天啓のまがめおそる
づき事あり今ト緒の先とくりふれば費るこゝろはあ
らず我一尺の唐紙と今三百石あり買はるゝとるこゝろさ
ましとるり 古老 雑話

夏禹廟

○浮橋河院安貞二年の辰系師大凡兩あり鴨河の水をさま
しん家まで溢るるバ官より多判友為兼とく河
と防ぐしむされども水衝つす為兼防ぐしてさくは
こゝろ在し一人の僧いづくともあり忽然として来り

為兼子若けて云この河水を防ぐんあハ東岸の南子夏の
禹王の廟と建て北子辨才天の社と建てこれと祭あるべ
と云ふと其の僧の姓くこゝろと知らず為兼長
のあてあゝ僧の教の如く東岸の南ハ兩社と建て二
まを祭り誓をさけし初るゝとるやとさぬで忽漲る水勢此
忽ち花まゝと云傳へるさまとて禹廟の今いづく子
ありやその路を知らず 雍州とてありて京師建仁寺町
小吏の社とてありて此を蛇子と祭るふありす矣ハ夏の
禹王と祭るあり昔鴨河も溢れし害を存はしよあり
禹王の廟と建て祭る日本より唐土及び諸の外國と称
して夷と云ふ為子夷國の神と云ふて浮世傳人あやまると

